

2019

フィールド スタディ ログ



2017年度Ⅱ期（春休み）および2018年度Ⅰ期（夏休み）に実施したフィールドスタディを収録しています。



法 政 大 学
人 間 環 境 学 部



「石垣島・白保のサンゴ礁文化を学ぶ」

担当教員名 梶 裕史

コース概要

日程	2018年3月1日～3月5日
場所	沖縄県石垣島白保集落
参加人数	14名

コースのねらい

「サンゴ礁文化」とは何か、それを継承する意義とともに、住民主体で持続的な地域づくりにとり組んでいる白保集落で開始された、手づくりの「スタディツアー」に参加して実感的に体験学習します。

内容

日本最南の沖縄県八重山諸島・石垣島にある白保集落は、かつては「魚湧く海」と呼ばれた豊かなサンゴ礁の海に面して、自然の恵みを持続的に暮らしに活かす「半農半漁」の自給自足的な生活文化を築いてきた農村です。この白保は、海の埋め立てによる新空港建設計画をめぐる長年の苦難を乗り越え、21世紀から、外部自然保護団体WWFが設立した組織「しらほサンゴ村」と住民有志との協働により、サンゴ礁文化の継承による持続的な地域づくりを始めました。その活動は現在第二段階に入り、NPO 夏花という新たな住民組織に受け継がれています。このNPOが収入源の一つとして始めたのが、地域のとりくみを体験実習するプログラムを豊かに含む「スタディツアー」です。本FSでは、初日の午後に現地集合し、夕方からスタディツアーに参加しました。今回は天候に恵まれ、昨年要望したものの中止となった「漁体験」を初めて体験することが出来て、恒例の夕食交流会も含めて、白保の方々と私たちとの親しい付き合いがまた深まったことを実感する5日間になりました。



漁体験



シュノーケリング



習った伝統芸能を交流会で披露

- 1日目：**午後、干潮時にワタンジ（サンゴ礁の干潟）観察後、夕方から「入村式」。サンゴ礁文化のレクチャーなど
- 2日目：**午前 NPO 夏花理事長のガイドで、沖縄の伝統的な集落景観の「原風景」が残る集落を散策。途中、古民家の庭で名物オバアを講師として、方言講座（交流会での自己紹介用）
午後 サンゴ礁の「イノー」（浅い海）で「漁体験」。一部、白保の子ども達も参加。
夕方～ 白保の方々との夕食交流会。学生は方言自己紹介のほか、余興として即席で習った「子守歌」の歌と踊りを披露。
- 3日目：**午前中、民宿マエザトのシュノーケル船にてサンゴ礁観察のシュノーケリング
午後 マイクロバスによる石垣島見学（この日のプログラムはスタディツアー外の自主企画）
- 4日目：**・「グリーンベルト」植栽の代表的な素材である月桃（げっとう）の高度加工施設の加工体験
・「白保日曜市」見学（地域活動の重要な収入源で、月桃を使った新商品など地産地消の「6次産品」販売も豊富）
・午後 ホームステイ先の「稼業」体験（野菜農家など） 夜は3家庭に民泊

5日目：午前 赤土流出防止植栽活動として、糸芭蕉約300株を植える → 午後「離村式」(NPOスタディツアー終了)、解散

日程をみると、「海」と離れてみえるプログラムも少なくない印象があると思います。全て、海と陸上の暮らしぶりとの密接なつながり—白保住民がエコな農業やライフスタイルを築かないと、「魚湧く海」「命継ぎの海」の保全は難しいこと—を伝えるねらいがあります。サンゴ礁を健康な状態に保っていくためには、地域をあげての陸上のとりくみが不可欠であり、しかもその活動がボランティアではなく収益を伴うことが、住民参加を促進するために非常に大切です。よって有料のスタディツアーに参加することは、ささやかながら白保の持続的な地域づくりに貢献することにもつながるのです。

このスタディツアーの最大の「売り」は、意識の高いNPO理事クラスの家庭に分宿し、稼業を体験するホームステイでしょう。1泊がこれに当てられ、体験者は、単に「自然」にふれるだけではなく、伝統的な生活文化の生きた体現者、すなわち自然に寄り添って生きる力を豊かに持つ人々と親しく触れ合えることこそ、自然と共生してきた文化が残る場所を訪問する最大の魅力であること—「人」が地域の最も尊い資源であること—に気付けるはずです。

そして、一度きりの旅ではなく、リピーターとして、「白保ファン」になって再訪してくれ、地域活動のサポーターになってくれるようなゲストを増やすこと、これがNPOがめざす「交流」なのです。私達はささやかながら白保サポーターの一員となるべく、継続的な参加に加えて、プログラム作りにも協力していきたいと思っています。



方言講座



—昨年FSで植えて育ったグリーンベルト



交流会で、民泊先ペアレントと共に

学習を終えて

「白保の人々の生活文化と海との深いつながりを実感」 1年生(参加時) 佐藤南帆

白保フィールドスタディーでは、実際に参加すると環境保全について学ぶだけでなく現地の方々と交流しながら白保の昔ながらの生活文化や伝統について学ぶことができました。子どもから大人、色々な方々と交流することで白保の実態をよく知ることができ、海を守るための知恵が詰まった文化が子どもまでしっかりと受け継がれていることがわかりました。「海は小さい頃から当たり前にあるもの」と民泊でお世話になった長間さんがおっしゃっていたように、海は白保に住む人々の生活の一部であり、自然と生活文化の深いつながりを身をもって感じることができました。

「夏に再訪してくれて、今では愛称で呼び合う仲」 長間盛子さん(民泊先ペアレントの一人)

都会の女の子四人が我が家に来たときは、一気に華やぎ眩しかった事を思い出します。オバアの田舎料理を美味しいと言ってくれたり、優しく話しかけてくれたり・・・彼女達が帰った後は本当に寂しかったです。四人のうち二人が、夏休みにゼミ合宿のついでに前泊で遊びに来て、日曜市を手伝ってくれたりしました。この二度目はぐっと距離が縮まり、孫ほどの年齢差ですが、今ではお互いを愛称でよびあっています。

「地域における就労継続支援・生活介護活動への参加 —障害者とともに同じときを過ごす—」

担当教員名 國則 守生

コース概要

日程	2018年2月1日～23日の4日間
場所	埼玉県三郷市
参加人数	10名

コースのねらい

このフィールドスタディは、短期間ですが、知的障害者・精神障害者が地域で生活するために行う作業や活動に学生が参加して地域での障害者福祉活動を理解し、学生自身が地域で何ができるのかをフィールドで考え実感してもらうことを目的に実施しているプログラムです。人間環境学部で実施される「人間形成」のためのフィールドスタディの1つで、現場でチームとして学習を行うという意味で1つのPBL (Problem-based Learning) と捉えています。

内容

フィールドの現場は埼玉県三郷市の社会福祉法人（緑の風福祉会）で、春季休暇期間の事前に設定された4日間、施設を訪問しました。参加活動は大きく分けて①生活介護および②就労活動（パン・クッキー製作・販売、資源回収、ポスティング、プラスチック部品組立、さをり織活動などの各種の作業・内職活動）の2つの活動に大別されますが、参加学生は施設利用者の4つのグループに対し、1日1グループを体験する形で活動を行いました。

障害者と活動をとにするのが初めての参加学生も多かったが、4日間の実習を通じて、さまざまな気づきを体験しました。

学習を終えて

4日間の実習記録を記載したフィールド・スタディ・ノートを作成（各日には所属した施設側職員のコメントも戴きました）したほか、①人間環境学部生として参加する目的、②参加前後のそれぞれの感想・気づき、③障害者福祉に関する自由調査（障害者にかかわる統計の整理、ノーマライゼーションの思想、わが国の障害者福祉の3つのパートからなる）などを取りまとめた報告書を作成しました。以下は、感想・気づきのなかの振り返りの一部です。

「4日間の実習はあっという間にも感じ、一日一日がとても濃く感じました。初日は、利用者の方との距離感に戸惑いましたが、最終日になると自然と接することができていました。生活介護型と就労支援型のそれぞれの班に関わったことで、福祉サービスの全体の流れを掴むことができました。」（4年 鈴木華奈）

「最初は、「もっと支えてあげなければ」とか「彼らのためにできることは尽くしてあげたい」と思っていました。しかし、職員の対応や仲間の取り組みを見て、私の考え方は一変しました。支援とは力を貸して助けることであり、手厚く世話をすることではない、と肌で感じることもできたのです。まず職員を目線で見ると、声かけをする際に“仲間の強みを生かして”・“それぞれの能力に合わせて”できることを全て任せていたのが分かりました。褒めと励まして温かく見守る環境だからこそ、支援が成り立っているのだと強く感じることもできました。また、私が仲間に「仕事楽しいですか」と訊くとすぐに「楽しい！」と笑顔で返して下さったのがとても印象的です。仲間も自分ができることを任せてくれるのがとても嬉しいんだと思いました。」（2年 梅野夏子）



さをり織の実習



軽作業の実習



フィールド・スタディ・ノートの記入

「別府阿蘇地域の地熱・火山活動ー自然環境と生活ー」

担当教員名 杉戸 信彦 竹本 研史

コース概要

日程	2018年3月4日～8日
場所	別府、および阿蘇くじゅう国立公園
参加人数	24名

コースのねらい

別府～阿蘇は「豊肥火山地域」に属する世界有数の地熱・火山地域です。前半はその豊かな自然環境、また地熱発電・地熱利用を巡検と講義で学びます。そして別府に焦点を絞り、歴史や文化に触れたうえで各班、野外観察や聞き取り等のフィールドワークを行って「課題発見」を目指します。

内容

コースの前半は、別府～阿蘇地域を巡りながら、地熱活動に関連する噴気や温泉、地熱発電と地熱利用、火山地域ならではの景観と噴火の歴史、人類の軌跡、火山噴出物、地形と土地利用に触れる時間を、全員一緒に過ごしました。事前学習で地図と文献を読み込み、知識とイメージを持って現場を踏むことで、机上と現地の双方向フィードバックを図っています（3/5の明礬地域および鉄輪地域の巡検・3/6の別府～阿蘇日帰り巡検）。

3/5には京都大学地球熱学研究施設（別府市）を訪ね、竹村恵二教授による講義と施設案内を通じて、研究の最前線や地熱活動の恩恵とリスクへの理解を深めました。竹村教授には3/6の別府～阿蘇日帰り巡検の午前中も現地にてご指導頂きました。

地熱発電・地熱利用に関しても、3/5には大分県農林水産研究指導センター農業研究部花きグループの「湯けむり発電システム」「地熱利用型スマート農業ハウス」を、3/6には九州電力八丁原地熱発電所を訪問し、施設見学を行いました。



明礬地域にある市営「鶴寿泉」



京都大学地球熱学研究施設にて

3/6の別府～阿蘇日帰り巡検は、別府から由布、くじゅうを通って阿蘇の大観峰を訪ね、その後八丁原地熱発電所に立ち寄るコースです。地形を俯瞰できる地点や、地質や土壌を確認できる「露頭」でストップし、事前に得た知識とイメージを総動員しながら観察を行いました。露頭ではとくに「黒ボク土」と「K-Ah火山灰」の分布と特徴を確認し、その意味を考えました。

大観峰から見渡す雄大な景観、また野焼きの現状と歴史等を含め、参加者各自がそれぞれ、さまざまなことを感じながら理解や発見をし、疑問を抱いたようです。快晴に恵まれたこの日、大観峰からは中央火口丘群や宮地付近、内牧温泉付近はもとより、立野付近をはじめ広大なカルデラの南部まで見渡すことができました。また、本コースのスコープからは外れますが、この日の朝は、由布岳の山頂付近など標高の高い地域に樹氷が発達していました。お昼過ぎに通過したくじゅう連山付近では、日中の気温上昇でとけた樹氷が輝きながら舞い落ちる幻想的な風景に出会いました。



阿蘇大観峰より中央火口丘群方面を俯瞰

後半は「泉都」別府に焦点を絞り、歴史や文化に触れる半日巡検（別府八湯語り部の会による「竹瓦かいわい路地裏散歩」）に参加した後、計1日にわたるフィールドワークを各班で実施して「課題発見」を目指しました。フィールドワークに関しては、方法論を事前学習で学び、その後何度か話し合っ、テーマと「行動計画書」を練り上げています。テーマは、別府市が行ってきた主に温泉資源を活かした観光推進策、別府市・大分市における自然資源を活かした観光事業、地熱発電と地熱利用の現状と課題、小規模地熱発電とその環境評価・利害調整と、多岐にわたりました。訪問先もテーマに応じて事前に検討を重ねて選定しました。

事後学習では、全体のふりかえりを行った後、フィールドワークで得られたデータを整理し、(1) 見聞きしたことやわかったこと、(2) その中で見えてきたことや疑問に思ったこと、をまとめ、(3) それらを踏まえた「問い」を立てる（調べるに値する問題を設定する）作業に取り組みました。

学習を終えて

地熱の勉強を目的として参加した FS でしたが、地熱だけでなく歴史、文化、観光等も学び、多岐にわたる学習が出来ました。見識の浅い事柄でも事前学習で基礎知識をインプットする為、現地で学習した際に深い理解、疑問が生まれ意欲的に取り組むことが可能です。グループワークでは班員と協力しあい、積極的に学ぼうとする姿勢が身につきました。この FS で深めた知識、新たな興味、抱いた疑問を今後の勉強に生かしていきたいと思っています。（2年 竹内美由紀）

今回のフィールドスタディでは「自然環境と生活」をテーマに学習を行いました。現地では実際に土や湧き水に触り、阿蘇の雄大な景色を見て、現地の方から貴重なお話を伺うなど、実際に行ってみなければ出来ない体験をすることができました。また、FS のメンバーとは一緒に数日間行動したことで仲良くなることができ、学習以外の面から見ても中身の濃い FS となりました。（2年 原田森都）

「津軽鉄道でむすぶまちづくり」

担当教員名 西城戸 誠 長峰 登記夫

コース概要

日程	2018年2月17日～20日
場所	青森県五所川原市、中泊町
参加人数	16名

コースのねらい

赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動や、コミュニティカフェの実践を学び、着地型観光、地域活性化のあり方を学びます。

内容

コースの狙い：本フィールドスタディは、赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動を見学しながら、奥津軽地方の「着地型観光」について考えていきます。企業組合・でるそーれの皆さんが運営しているコミュニティカフェの実践を始め、津軽鉄道沿線の地域づくり、まちづくりの実践を学ぶとともに、このフィールドスタディの実践によって、地域のまちづくりの実践をつなぎ合わせるという意味も込められています。本フィールドスタディは、訪問先から「学ぶ」という側面と、私たち自身が「地域にかかわる」ということがどういう意味を持つのかという点を再帰的に捉えることを企図しています。

コースの内容：1日目：五所川原駅近くのコミュニティカフェ「でる・そーれ」に集合し、五所川原の街歩きをした後、五所川原市の夏を彩る立佞武多の展示がある、「立佞武多の館」を訪問しました。その後、「地域の伝統文化と産業の再生」という講義の中で、立佞武多の館の菊地館長、津軽金山焼の中鉢さん、立佞武多師の福士さんのお話を伺いました。その後の宿泊はグループに分かれて、農家民泊をしました。地域の方といろいろな話をし、世代を超えた交流を行いました。

2日目：農家民泊先から集合し、昨夜の出来事のふりかえりを行いました。民泊を受け入れていただいた方の一人である、斉藤久子さんから、ご自身が民泊をするようになった背景についてお話を伺いました。その後、津軽鉄道のストーブ列車に乗り、津軽五所川原駅から金木駅まで移動し、太宰治の生家である斜陽館や、新座敷、ぽっぽ屋を訪問し、太宰治を巡った観光の「質」の違いについて学びました。その後、津軽鉄道の社内で、津軽半島観光アテンダント、津軽鉄道株式会社の関係者からの津軽鉄道に関わるさまざまな活動のレクチャーを受けました。



ねぶたの紙貼り体験



農家民泊先の方と一緒に



新座敷にて太宰治の話を伺う



コミュニティカフェでる・そーれの「うちごはん」

3日目：つがる市フィルムコミッションの川嶋大史さんに、地元を舞台とした映画づくりについて話を伺いました。地元で撮影されたショートムービー（「ふりむくな」AKB48 チーム8 青森県代表・横山結衣主演）でも登場した神武食堂で昼食をとった後、稲垣薫の会の方の指導のもと、わら細工の体験を行いました。宿泊先の中泊町ふれあいセンターに移動し、これまでのフィールドスタディの内容の振り返りを行いました。夕食は、中泊町のグリーンツーリズム団体「かけはし」の方をお願いをし、学生たちも少しだけ夕食づくりを手伝いました。

4日目：「かけはし」の方が作ってくれた朝食を頂いた後、中泊町の農家（イネ子の畑）に伺い、冬のアスパラガスの収穫体験と佐藤イネ子さんの地域における活動の話伺いました。その後、公開講座 法政大学生による奥津軽フィールドスタディ現地発表会テーマ「大学生が魅力を感じる農山漁村体験と観光を組み合わせた旅行プラン」で、参加学生が発表を行いました。なお、NHK 青森の取材を受け、地元ニュースで取り上げられました。「でる・そーれ」で昼食をとり、五所川原を後にしました。

事後学習会では、フィールドスタディ全体の振り返りを行い、今後の人間環境学部での学びとの関連について議論をしました。



稲垣藁の会による、藁細工体験



津軽鉄道の中での講義



冬のアスパラガス収穫（イネ子の畑）

学習を終えて

私は、奥津軽フィールドスタディに参加して、素敵な人々に出会うことができました。フィールドスタディに参加するまで、観光とは観光客が楽しむことだと考えていました。しかし、フィールドスタディで奥津軽の方の暖かさに触れたことで、観光は地元の方も楽しむものだと感じました。民泊や、でるそーれの方などの奥津軽で出会った方は、全員笑顔でした。また、観光に携わっている多くの人から、地元に貢献したいから協力しているという話を伺いました。そのような方達と四日間過ごしていくうちに、私は、奥津軽が心の温まる居心地のいい場所であると感じました。今まで、色々な観光地に行ったことはありますが、人の暖かさに触れ、また会いたい人ができた観光地は初めてでした。また、奥津軽フィールドスタディに参加し、奥津軽について更に学びたいと思いました。（1年・反田彩）

奥津軽 FS での4日間は普段経験できないような貴重な時間を過ごしました。2月に吹雪く奥津軽の寒さを肌で感じながら、まさに着地型観光としてのグリーンツーリズムを体験しました。その一つで、一晚を過ごした農家民泊では、郷土料理を食し、五所川原地域の歴史や立佞武多のお話、グループによっては雪かきのお手伝いをする事もありました。普段過ごす事のできない貴重な体験や地域の方々との会話を通して、五所川原の地域を身近に感じる事ができました。さらに、津軽鉄道のストーブ列車に実際に乗車し、着地型観光を体験しました。津軽鉄道サポーターズクラブという組織が津鉄を中心に、季節ごとの周辺イベントを多く開催し、地域に根ざした活動を行なっていることが話の中で分かりました。最後にこの体験を通して、グループごとに津軽鉄道を中心とした着地型観光の『友達に薦めたくなる旅行プラン』を行程表とスケジュールを用いて発表しました。私たちの班は、家族で行けるような旅行プランをテーマに、奥津軽地方の北側から津軽鉄道を利用して南下していくプランを組みました。プラン内容として、FS内で巡った土地や実際に体験したプログラムなどを元に各々の班が、テーマに沿って発表しました。実際に体験してなければ分からない感動と貴重な経験をすることができる充実したプログラムでした。（2年・和田泰輔）

「平田オリザの演劇ワークショップ」

担当教員名 平野井 ちえ子

コース概要

日程	2018年2月26日～3月1日
場所	こまばアゴラ劇場内青年団稽古場
参加人数	12名

コースのねらい

対話と身体表現について感性を磨く体験学習を、コミュニケーション能力の向上に役立ててほしいと考えました。講師の平田先生には、文化政策的観点から最先端の話題をご提供いただきました。

内容

演劇ワークショップという、「プロ向けで難しいのでは?」とか「大きな表現は恥ずかしい」などといった思い込みに基づくハードルの高さが想定されます。たしかに演出家のワークショップは、その方の演劇理念が集約されているので、「ついていけるかな」と心配する気持ちもわかります。本ワークショップは、そうした不安を払拭して、段階的にコミュニケーションとは何かを学んでいくものでした。基礎的なコミュニケーションゲームから始まり、平田先生のテキストを用いたワークショップを経て、最後にグループ創作を行いました。講義の部分では、芸術・教育・社会の関わりについて豊富な事例で解説していただきました。『下り坂をそろそろと下る』で論じられている内容を深く理解することができたと考えます。以下が4日間の概略です。

1日目	オリエンテーションと簡単なコミュニケーションゲーム、テキストを使ったワークショップ、講義「芸術の役割」、青年団稽古見学『革命日記』
2日目	テキストを使ったワークショップ、講義「社会のセーフティネット」と「大学入試改革」
3日目	テキストを使ったワークショップ、グループ創作、講義「文化による社会包摂」、青年団稽古見学『革命日記』
4日目	グループ創作、グループ創作の発表と質疑応答、劇団「Pure Nation」のリハーサル見学

グループ創作では、6人ずつのグループに分かれて、10分程度の演劇作品を創りました。互いのアイデアに耳を傾け、多様性を擦り合わせて一つの方向にまとめていくことは、社会の様々な局面で求められる能力です。しかも時間には必ず制約があります。プロダクトの質よりもプロセスで学んだことを大切にしてほしいと思います。

プロの劇団の稽古場は学生には非日常的な空間で、この場所でのワークショップは舞台の裏側にふれながらの臨場感あふれる贅沢な学習体験でした。また青年団の本番を控えた稽古見学もでき、演出家のワークショップと作品鑑賞のつながりを実地でたどることができました。国際舞台の第一線で活躍する演出家から直接指導を受けられて思い出深い経験となったことでしょう。劇団拠点の豊橋移転前にたいへん貴重な機会でした。

これを機会に、是非劇場に足を運んでください!

学習を終えて

FS平田オリザの演劇ワークショップに参加した小藤裕隆さんの感想です。

このワークショップに参加することができて本当によかったです。前年7月に平田先生作・演出の『さよならだけが人生か』を観劇し、最近こまばアゴラ劇場についてレポートする機会もありました。自分一人で舞台を観たりその内容を考えたりしているうちは、よく理解しきれない部分も少なくなかったのですが、今回初めて平田先生から直接講義を受けたり演劇づくりの

指導を受けたりできて、平田演劇をどのように鑑賞したらよいのかがとてもよくわかり、感激しました。演劇の社会的役割をテーマとした講義も興味深かったです。



グループ創作に向け、学生が考えた状況設定について、アドバイスをいただきました。



行き詰ると、見るに見かねた平田先生の助け舟が出ました。頼り過ぎてはいけませんよ。



グループ別に人物づくりや物語の進行を相談しています。意見をまとめるのは大変ですね。



登場人物と物語の方向が見えてきたら、台詞と動作を考えます。

「国際平和の追求－国際法の現場を知る－」

担当教員名 岡松 暁子 北川 徹哉

コース概要

日程	2018年3月9日～16日
場所	オランダ(アムステルダム、ハーグ、デルフト) ドイツ(ハンブルク、リュウベック)
参加人数	25名

コースのねらい

国際裁判所、大使館、リュウベック旧市街地(世界遺産)等を訪れ、日本を振り返りつつ国際感覚を身に着けます。また、アンネ・フランクの隠れ家やノイエンガンメ強制収容所を見学し、ナチスによるユダヤ人迫害について学びます。

内容

I 国際社会の秩序形成、国際紛争の平和的解決

1. 国際司法裁判所(ICJ)は、国際連合の主要な司法機関で、国家間の紛争を裁判するところです。我々はこの裁判所の法廷で、職員の方から英語で国際裁判の仕組みや特徴についての説明を受け、それに対して英語で質問をしました。



ICJの前にて



ICJの法廷にて講演を拝聴

2. 国際刑事裁判所(ICC)では、法廷を見学し、日本人職員の方から、ICCの役割りと課題について講演をしていただきました。国際社会が個人を裁くことの意味を考えました。

3. 在蘭日本大使館では、外交官の方々から、国際社会で日本が果たす役割について、また、外国からみた日本についての貴重なお話を伺うことができました。

4. ハンブルクの国際海洋法裁判所(ITLOS)では、柳井俊二判事に、これまでに同裁判所で争われた事例や、海洋の国際管理について、大法廷にて講演していただきました。海洋国家である日本が海の秩序形成に果たす役割は大きいと感じた時間でした。



ITLOSの大法廷にて柳井裁判官の講演を拝聴

II 人権について考える：ユダヤ人迫害問題を題材に

アムステルダムにあるアンネ・フランクの家は、第二次世界大戦期にナチスの迫害から逃れるために、フランク一家など8名が隠れていた家です。本棚の裏の部屋で約2年もの間、息を殺すようにして生活していたことを思うと、胸が痛みました。

ハンブルグ郊外のノイエンガンメ強制収容所には、ユダヤ人が働かされていた工場の跡が残っています。ここに来ると学生たちの言葉が少なくなり、このような悲劇を二度と繰り返してはいけないとの思いを強めました。

Ⅲ 外国の歴史・文化への理解

世界遺産となっている、ハンザ都市リュベックの旧市街を散策し、かつて北海・バルト海交易で栄えたハンザ同盟について学びました。また、一日の研修が終わったあとは、遅くまであいている美術館や、オペラの鑑賞など、思い思いの時間を過ごしました。ヨーロッパの文化に触れ、多様性を身をもって感じ、世界で仕事をする日本人の方々と交流することで、それぞれが大きな刺激を受けたことと思います。

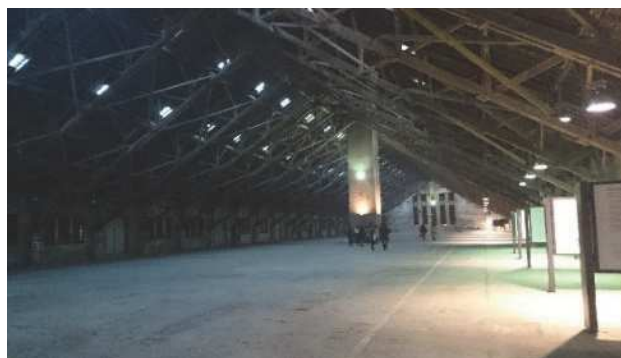
学習を終えて

<2年 矢澤優季>

私は今回の FS で訪れた国際機関を、国際平和を実現するための組織として習ってきましたが、国際平和と言っても、各国は自国の利益を第一に考え、メリットが一致した時に初めて協力し合うものであり、実現は不可能なのではないかと常々考えていました。しかし今回直接お話を伺い、いかに現場の方々が対話を大事にし、真剣に国際平和の実現を目指しているのかを知ることができました。ICC では協力して欲しい国がどのような立場にあるのか、懸念材料は何か、など事件の背景にある情報を欠かさずチェックしているそうです。協力できない国にはそれなりの理由があり、ほとんどの国は普段から協力的で、ICC は非協力国にいかに協力してもらうのかを持っている情報をもとに交渉を行うと教えていただきました。それらのお話から、私は国家間の交渉であっても、相手はあくまで人なのだと思います。実際に国際機関を見て回り、これらは無機質なものなどでなく、世界の国々が平和を実現しようとした思いの結晶なのだと改めて認識することができました。

<国際海洋法裁判所裁判官 柳井俊二氏>

法政大学フィールド・スタディー受け入れ先の一つとして、在ハンブルグ国際海洋法裁判所でこれまで4回学生達を受け入れ、大法廷において同裁判所の判例を中心に講義を行い、学生達と引率の先生方の打ち上げ会に参加して学生達の声を直接聞くこともできた。参加学生達は皆、新鮮な刺激を受けていた。同時に、英語力の弱さを痛感した学生達も多かった。新しい文化は、しばしば異文化間の交流から創造される。特に若年層の内向き傾向が強い我が国では、若い内に外国の文化に接して良い刺激を受ける機会を提供することが大事である。その意味で、このフィールド・スタディーは、素晴らしいプログラムである。更に、このような海外研修を一過性のものとすることなく、留学等一層の国際経験獲得に向けた指導をすることも必要であろう。グローバルに活動する内外の企業が国際経験を持つ人材を求めていることを学生達は知るべきである。この有意義なプログラムが末永く続くことを願って止まない。



ノイエンガンメ強制収容所の工場跡



リュベック旧市街地のホルステン門



デルフトのグロチウス像前

「オーストラリアフィールドスタディ：英語と環境保護を学ぶ」

担当教員名 ストックウェル エスター

コース概要

日程	2018年3月5日～3月18日
場所	オーストラリア、クイーンズランド州、 ゴールドコースト
参加人数	15名

コースのねらい

以下の三つの大きな研修目的があります。

- ① ボンド大学付属語学学校で英語を習うこと
- ② 世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶこと
- ③ オーストラリアの文化を学ぶこと

内容

オーストラリア・フィールドスタディ（AFS）の特徴は、①大学付属英語学校での語学研修、②オーストラリアの文化を学ぶ、③世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶ、の3つを統一的に学習・体験できることです。

語学の授業は、クイーンズランド州ゴールドコースト市内のボンド大学キャンパス内にある大学付属語学学校（Bond University English Language Institution (BUELI)）で行われました。BUELI 授業の開始初日に、Placement Test（英語力の判断をするためのテスト）が実施されました。このテストのスコアに基づき授業を受けるクラスレベルが指定されます。これは、「生徒の現在の能力にあうレベルで英語を学ぶことがその習得に役立つ」という考えからです。授業のプログラムは、学習の基礎となる項目である「聴く、話す、読む、書く」の能力向上を目指して総合的に進められました。

2週間の本フィールドスタディ中は、各学生が、日本人学生の受け入れ経験のあるオーストラリア人の家庭で過ごしました。オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことも貴重な経験となりました。

フィールドスタディではタンガルーマ島（一泊二日）、ラミントン国立公園（日帰り）の2カ所を訪ねました。オーストラリアは世界でも最も豊かな自然環境をもち、かつ自然環境や動植物の保護に積極的な国のひとつですが、そこで自然環境や動植物の保護について勉強しました。

タンガルーマ、モートン島は、世界で三番目に大きい砂の島です。モートン島には様々な自然環境があり、素晴らしいビーチや砂丘を始め、湖、小川、岬等の地形、スゲ、ペーパーバッグスワンプ、バンクシア、マングローブなどの植物の育成地にもなっています。また様々な野鳥も生息しており、ジュゴン、イルカ、クジラ、海亀、エイなど多数の海洋生物が生息しています。モートン島の殆どの場所は国立公園に指定されており、厳しい取り決めにより自然を保護しています。参加する学生は1泊2日の日程で、特に元気な野生のイルカ達に直接餌を与える貴重な体験を含む、島にある様々な自然環境を体験し、その保護などを学びました。そして、島の自給自足についても学びました。

ラミントン国立公園は1994年にユネスコの世界遺産に登録された、 Gondwana 雨林保護区の一つの場所です。レミントン国立公園には、亜熱帯、乾燥、温帯、寒帯の気候に属する植物が生息していて、太古の自然を思わせる景観が広がっています。亜熱帯地域のナンヨウスギ、寒帯地域にのみ見られるナンキョクブナ、また最古のシダ植物などの170種以上の希少な植物の他、クサビオヒメインコやアルバートココドリなどの絶滅危惧種を含む270種の鳥類、フクロギツネやパルマワラビー、ヒメウォンバットなどの珍しい動物を見ることが出来ます。本フィールドスタディでは、この貴重な自然をオーストラリアの政府がどのように保護しているか、どのように eco-tourism に結びつけているかなどを学びました。

こうしてAFSでは、英語学校で英語を学び、FSで自然環境や動植物の保護について勉強し、そこで学んだことについてホームステイ先の家族と話すなど、オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことができます。

学習を終えて

学生から AFS の感想

私が AFS に参加した理由は、英語力の向上に加えて固有種が多く自然豊かなオーストラリアで生態系保全について学びたかったからです。ホームステイ先での生活とボンド大学での授業は英語力を向上させるための良い機会でした。また、タンガルーマ島での体験は特に充実しており、海の生態系保全についてのレクチャーを英語で受け、野生のイルカに餌付けをしたことは私にとってかけがえのない経験になりました。ラミントン国立公園ではガイドの方の説明を聞きながらオーストラリアの豊かな自然に触れ、実際に目で見て感じることの大切さを学びました。

現地では、語学と環境の両方を学習し、充実した2週間を過ごせました。語学学校では、世界各国から来た学生と交流し、ホームステイ先では英会話を楽しむほか文化の違いなども体感しました。校外学習では、オーストラリアの自然を堪能しその保護方法等を学んだことで、自然に対する価値観が変わりました。また、自由時間もあり、自分の行動力次第で何でもできるところがこの FS の魅力だと思います。



タンガルーマ、モートン島で海洋生物学の専門家から話を聞く



タンガルーマ、モートン島



レミントン国立公園の森で専門家から話を聞く



レミントン国立公園で珍しい鳥



英語コースを終え、記念撮影



ボンド大学キャンパス

「障がい者福祉の体験 in 台湾」

担当教員名 朝比奈 茂 宮川 路子

コース概要

日程	2018年3月1日～5日
場所	台湾 40454 臺中市北區學士路 98 號 臺中中山堂 Chung Shan Hall
参加人数	11名（社会人学生5名含む）

コースのねらい

障がい者が国外(台湾)で音楽交流演奏会を実施する際、ソフト面、ハード面とも日本とは異なる中で、交流会を成功に導く様々な過程を学習します。また障がい者福祉活動に携わっている方々（職員及び障がい者の家族）と意見交換をすることで、障がい者の生活現状及び日本と台湾の福祉環境について理解を深めます。

内容

フィールドスタディー（FS）協力団体である「ゆきわりそう」は、本年度創立30周年を迎えました。その記念行事の一つとして、今回、台湾において、台中市の私立恵明盲学校の学生と台中市合唱団及び台中市行政の協力を経て、音楽交流演奏会を開催しました。その記念行事に、人間環境学部の学生が発から帰国まで同行する機会を与えられ、3月1日(木)～5日(月)の4泊5日に渡って、障がい者と一緒に台湾への旅に出かけました。今回の演奏会に参加した総人数は192名であり、関西空港から1便、成田空港から1便、羽田空港から2便、計4便での交流会でした。障がい者の方は（その程度にもよりますが）、日常自由に旅行など行けないため、家族や支援者のサポートが必要となってきます。健常者は自由に旅行に出かけられ、海外にも行けます。今回の音楽交流演奏会は、障がい者本人またはその家族から「記念に外国に行こう！」と声があがり実現したそうです。国内でさえ、移動手段や宿泊施設など、多くの課題がある中で、外国での交流会は、かなりハードルが高く様々な配慮や成し遂げるパワーが必要となります。今回の台湾の旅は、ゆきわりそうの職員の方々、その家族、その他関わってくれた全ての人の協力があったから、無事に終了したと感じております。

【日本での合唱練習】

参加学生は事前の学習として、休日にも関わらず、障がい者の方々と一緒に、数回の合唱練習に取り組みました。学生によっては、5回の合唱練習に参加した学生もいました。曲目は「ふるさと」「台湾の歌」「ベートーヴェンの第9」などです。練習会の時点では、今後、何が起こるか想像もつかなかったようです。

【3月1日～5日】

初日の天候は雨が降っており、終日移動で終わりました。飛行機に乗る際の手続きや機内での車椅子の位置、空港職員の対応など、多くのことを学びました。健常者ならすぐに通過したり、済ませたりできますが、障がい者と一緒なので、同じようには行きません。効率通りいかない事も、多々あり、全てにおいて良い経験になりました。



搭乗予定の飛行機（成田空港）



台湾桃園空港内で介助する学生



台中市中山堂コンサートホール

二日目はリハーサルの日です。本番の会場を使用し、お昼ご飯も会場内で食べ、終日練習に取り組みました。舞台の上には本番で一緒に演奏するオーケストラの席も用意されており、指揮者からも細かい指示が与えられ、成功するまで何回も練習を行いました。適度な疲労感が残り、緊張はありますが、比較的その晩は、よく眠れた模様です。

三日目は演奏会当日です。学生の皆さんも、日本から持参した黒の正装で本番に臨みました。合唱を行うメンバーは、台湾からは私立恵明盲学校の学生さんと台中市合唱団の皆さんです。時間が迫るにつれ観客が徐々に集まり、1600席ある会場は、開始前に満員状態。チケットも事前に完売したようです。司会者による煽動、掛け合い、笑いあり、歓声ありの楽しく、充実した演奏会でした。

四日目はそれぞれの担当する障がい者と一緒に終日、台湾の観光を楽しみました。とはいえ、本学学生諸君は、常に支援サイドにいるため、観光のサポートとして活躍しました。

五日目の午前中は自由行動、その後日本への帰国となりました。

学習を終えて

5日間の旅で障害を持つ方と過ごして、障害について考えさせられることがいくつかありました。身体的、知的、精神的な障害を持つ人もみな健常者と平等であるという点です。私は今まで、ハンディキャップを抱える人とまともに関わったことがありませんでした。今期履修している授業の中で学びましたが、そうした方々は健常者用に作られた社会が生きづらいことから外にあまり出られないそうです。しかし、誰もが幸福になる権利を持っていて、障害があるからといってそれが制限される理由にはなりません。今回、健常者とハンディキャップを持った人がみんな一つになって歌ったことで、みんな平等なこと、同じ喜び、楽しさを共有していることを感じました。私は今まで、あらゆる障害を正しく理解していませんでした。知的障害のある人だって「ありがとう」も「ごめんね」もきちんと言うことができます。感情のコントロールが上手くできないことを本人も自覚していて悔やんでいる人もいます。障がい者というレッテルを貼らず、一人の人として向き合ってその人がどんな人かを知り、自分がどのように行動したら一緒に社会へ出られるか考えることが本当の福祉なのではないかと思いました。 (FS 参加学生報告書から一部抜粋)



交流会前日のゲネプロの風景



交流会終了後、成功を喜ぶ参加者と社会人学生



コンサートホール内にあった交流会の横断幕



交流会終了後、達成感溢れる学生と参加者

「地域特性を活かした持続可能なビジネスを考える —青森県津軽地方を中心として—」

担当教員名 金藤 正直

コース概要

日程	2018年8月21日(火)～24日(金)
場所	青森県津軽地方(弘前市、黒石市、板柳町など)
参加人数	22名(学部生21名、大学院生1名)

コースのねらい

青森県は、りんごだけではなく、桃やぶどうなど地域特性(風土)を活かした新たな農作物にも力を入れ、農家(生産者)、製品・加工業者、流通・販売業者などから構成されるフードシステムを作り、ビジネスを展開しています。こうした取組みに加えて、県では、各地で再生可能エネルギー事業にも注力し、このエネルギーを活かした新たなビジネスモデルも検討しています。このフィールドスタディでは、青森県津軽地方を対象とし、再生可能エネルギーを活用したフードシステムとそれによる新たなビジネス案および地域活性化策を、事前学習、現地調査(インタビュー調査)、「まち」の歴史・文化などをもとに検討していきました。

内容

今年度のFSでは、初日から弘前実業高等学校(弘実)の高校生14名とOBOG3名(現在、大学生)、そして、弘前大学農学生命科学部の学生2名にも参加してもらい、事前学習時に編成した6つの高大連携ワーキンググループ(WG)(農作物研究・開発WG、農作物生産・販売WG①、農作物生産・販売WG②、製品開発・販売WG、エネルギー生成・農業利用WG、観光農園WG)で、訪問先での学習およびインタビュー調査とこれらの成果をもとにした報告会を行いました。

まず初日は、青森県産業技術センター(黒石市)と温泉熱を活用したいちご農園(田舎館村)を訪問しました。ここでは、再生可能エネルギー(温泉熱など)を活用した農作物の生産方法に関する講義を受講し、また、その方法をもとにした試験研究(いちご生産など)の現場を見学するとともに、研究内容に関するお話も聞きました。その後、弘前大学生協の食堂で、大学生と高校生の交流会を開催しました。

次に、2日目は、板柳町に行き、monoHAUS(モノハウス)と板柳町ふるさとセンター・りんごワーク研究所を訪問しました。monoHAUSでは、姥澤氏から、りんごの木箱を活かした商品の開発・製造・販売やブランド化(又幸)、また、木箱がもたらすりんごへのより良い影響に関するお話を聞きました。次に、板柳町ふるさとセンター・りんごワーク研究所では、葛西所長や會津氏など事業関係者から、同町でのりんご産業とそれを支える組織間(町営の生産・加工・直売所)の関係、さらには、りんごワーク研究所のビジネスモデルの特長について学習しました。



講義の様子



いちご農園の見学の様子



木箱商品のブランド化の講義



町営りんご事業の講義

続いて、3日目は、津軽ゆめりんごファームと岩木山麓しらとり農場を訪問しました。最初の訪問先である津軽ゆめりんごファームでは、平井氏から、農産物の生産や加工・販売、そして、現在力を入れている観光農園の取組みに関するお話を聞きました。その後、同ファームにあるりんご、桃、プラム、ブルーベリーの農園にも行き、もぎ取り体験も行いました。次の訪問先である岩木山麓しらとり農場では、農場内の見学と、白鳥氏から農場の歴史、在来種の野菜の可能性、農業のビジネスモデルの基礎となっている CSA（地域支援型農業）のお話を聞きました。

最終日は、弘前大学人文社会学部の内藤周子先生にも参加してもらい、弘実で6つのWGによる持続可能なビジネスモデル報告会を開催しました。この報告会では、各チームは、事前学習と3日間の学習をもとに研究・調査の報告を行い、また、その報告に対する議論・意見交換を通じて、地域特性と既存資源を活用した県内で将来新たに展開すべきビジネスモデルと、その実用可能性を検討し、提案しました。報告後、内藤先生より各WGの順位が発表され、最後に、弘実の山口先生の総評で報告会が終了しました。

学習を終えて

今後のFSも、今回の活動内容の反省点とともに、事後学習で参加学生・院生が行った自己評価の内容も踏まえ、将来必要とされる新たなビジネスを展開できるモデル構築を目指してもらえるコンテンツにしつつ、参加学生・院生（また高校生）への有効的な学びを提供していく予定です。最後に、今回のFSに参加した学生の感想を紹介します。

1) 参加学生の感想①

FSでの学習を通じて、チームワークまたはグループワークの難しさや大切さを感じた。また、現地に行ったり、事業関係者から直接お話を聞くことで、著書や論文などを読んでも明らかにされていない数多くの情報を得ることができた。

2) 参加学生の感想②

地域特性（風土）を考慮に入れながら、農家（生産者）のりんご産業への強い思いや農業への拘りなどを理解することができました。



桃のもぎ取り体験



CSAに関する講義



打ち合わせの様子



報告会の様子



FS参加者全員の写真

「陸・海・空・宇の交通運輸を支える」

担当教員名 北川 徹哉

コース概要

日程 2018年8月30日、31日、9月3日、4日
場所 東京、茨城、千葉
参加人数 25名

コースのねらい

社会と経済の基幹である陸上、海上、航空の交通運輸を支える現場、そして地上と宇宙とを結ぶ重要施設を訪れます。業務の魅力と重責を肌で感じましょう。

内容

行程1日目は、まず、竹芝小型船ターミナルより新東京丸に乗船し、東京港の施設を海上で案内していただきました。新東京丸は東京都港湾局が所有する視察船であり、世界各国からの要人を案内するときにも使用されます。船内は立派な海上会議室であり、東京港の歴史や施設さらにはゴミ処理・埋立までも、わかりやすい解説により勉強することができました。我が国は海洋国家であり、海上物流とそれを支える港湾設備が高度に発達してきたことを改めて実感した東京港一周の船旅でした。新東京丸を下船すると、ただちに浜松町駅へ向かい、東京モノレールに乗車して天空橋駅にて下車し、ヤマト運輸の羽田クロノゲートを訪れました。いわゆるクロネコヤマト宅急便の国内・国際拠点であり、膨大な数の荷物が途切れることなく流れ、様々なセンサーとコンピュータ制御によって適切に仕分けされてゆく様子は「いつまで眺めていても飽きない」と思うほどでした。また、近年の宅配便の発達、ならびに更なる付加価値の創造へ向けた事業展開も学ぶことができました。ややタイトなスケジュールを終えて心地よい疲れの中、夕日を見ながらの帰宅となりました。

行程2日目は筑波宇宙センターをバスで見学しました。国際宇宙ステーションでの生活を想定した閉鎖環境や低圧環境への宇宙飛行士の適応訓練設備などを見ることができました。とくに、国際宇宙ステーションの一部である「きぼう」の運用管制室では、今この瞬間の国際宇宙ステーションの様子が映し出されている大きなスクリーンとコンピュータ群に学生は圧倒され



新東京丸での東京港の視察



羽田クロノゲートの視察



筑波宇宙センターの視察



日本航空機体整備工場の視察



成田国際空港の視察

ていました。また、地上から 24 時間体制で「きぼう」の運用を支えている管制官の働きぶりは感動的でした。撮影等は一切禁止されているため、スマホやカメラなどは一旦預けることが義務づけられ、宇宙開発は機密とセキュリティの塊であるということを実感しました。

行程 3 日目は羽田空港の一面にある日本航空機体整備工場を訪問しました。広大なドックに入ると複数の機体が整備中でした。整備士の方々が旅客機の各部で慎重に作業をしており、安全で円滑な運航と乗客の命にかかわる重責が伝わってきました。旅客機をこれほど近くで、ほぼ真下から見る機会はありません。また、ジェットエンジンが分解整備されていたり、すぐ外の滑走路では旅客機が轟音とともに離発着しているなど迫力満点でした。

行程 4 日目は、成田国際空港を訪れ、2 名のガイドさんの案内で視察しました。学生は、第一ターミナルの屋上で滑走路全体を見わたしながら聞いた説明の中で、滑走路や誘導路の識別記号番号の意味が印象に残ったようです。国際空港ならではの各国の文化に配慮された施設にも感銘を受けていました。空港の業務の多くを学ぶことができ、また、成田国際空港の建設時の闘争の爪痕を見ることもできました。第三ターミナル（LCC 専用）へは行かず、第一と第二のターミナルのみを徒歩とバスで回りましたが体力勝負の視察となり、終了時には学生は足が棒のようになったと言っていました。

学習を終えて

「東京港でのコンテナの多さ、埠頭や船舶の大きさに驚くと同時に、東京港の重要さが実感できました。」(1 年女性)「宅急便ネットワークが地球規模になっていることや付加価値として様々なサービスを提供していることがわかりました。」(1 年女性)「筑波宇宙センターへの訪問を一番楽しみにしていました。見るもの聞くものほとんどが初めてのものばかりでお腹一杯になりました。」(2 年女性)「JAL 機体整備工場で働いている人は皆とても生き活きとしていて、誇りを持って働いているように見えました。自分も自分なりに誇りを持てる職業に就けるよう今を努力したい。」(1 年男性)「将来は空港で働きたいので、CA やグランドスタッフが働いている姿を見て憧れを持ちました。」(1 年女性)

「国立公園の魅力とそれを支える地域活動」

担当教員名 高田 雅之

コース概要

日程	2018年9月6日～10日
場所	北海道：利尻礼文サロベツ国立公園
参加人数	29名

コースのねらい

国立公園の優れた自然にふれるとともに、NPO 活動などによる保全や、産業振興との共生に取り組む人々の活動現場を訪ね、自然の魅力を支える地域社会の在り方について学びます。また稚内市の自然エネルギーの現場を訪ねて自然との関わりを考えます。

内容

サロベツ湿原地域

初日はまず、日本最北の国立公園「利尻礼文サロベツ国立公園」の中のサロベツ湿原を訪ねました。活動の中核施設であるサロベツ湿原センターで NPO サロベツ・エコ・ネットワークの方や、長くサロベツを見守り、また関わってきた地域の方のお話を聞いて、サロベツの自然や NPO 活動、地域の人々との関わりについて学びました。またサロベツ湿原の木道を散策しながら、かつての泥炭の採掘跡地や、地平線が見える日本最大の高層湿原の雄大さを体感しました。夜は豊富温泉で星空観察を行い、今朝発生した胆振東部地震による停電の中で一夜を過ごしました。

2日目は、豊富町大規模草地牧場の雄大な景観を眺め、牛を間近に見た後、海岸に沿って連なる長大な海岸砂丘林内を散策しました。そして失われた海岸林を再生する植林用のミズナラ（ドングリ）を育てる苗畑で草むしり活動に汗を流し、実際の植林再生地の見学をしました。午後は山本牧場に酪農の現場を訪ね、子牛にミルクをあげる体験とともに、湿原と農地との共存の取り組みについて学びました。次いで環境省の自然保護官から国立公園の管理や課題についての講話を聞き、牧草地を歩いて湿原の自然再生の現場を案内していただきました。

利尻島地域

3日目はノシャップ岬をまわって稚内から船で利尻島を訪ねました。神居海岸パークで観光体験プログラムのひとつであるウニ採り体験をし、自分でさばいたウニを軍艦巻きにして舌鼓を打ちました。そして地域おこし協力隊の方に島の自然資源を観光や地域づくりに生かす取り組みについてお話いただき、有意義な意見交換を行いました。続いて街中に残された古い建物と倉を生かした「島の駅」を訪ね、アートや文化の視点から地域づくりに取り組む活動について学びました。夕方は溶岩が所々むき出しになった杓形の岬公園を散策し、海に沈む夕日を見ることができました。夜はホテルで利尻島自然情報センターの方



大規模草地牧場で牛と触れ合う（サロベツ）



環境省自然保護官より自然再生について説明（サロベツ）

に利尻島における外来種問題についてお話いただき意見交換を行いました。

4日目は種富湿原で外来種オオハンゴンソウの駆除体験を行い、道具を使って根から掘り取ることの難しさを実感しました。次に島の経済を支えるウニ種苗センターを見学し、北麓野営場から利尻山の登山道を甘露泉水まで歩き、自然観察をしながら登山道の浸食問題やトイレ問題、外来種持ち込み防止などを現場で学びました。続いて利尻を代表する景勝地である姫沼、オタドリ沼、南浜湿原を訪ね、美しい景観とそれを構成する植物や水辺に触れました。仙法志御崎公園でアザラシを見たのち、利尻町立博物館を訪ねて施設を見学し学芸員の方から地域の自然を知り資料を保存することの大切さについて学びました。夜の「利尻塾」では風車と景観、そして野鳥への影響を題材に利尻島自然情報センターの方と実り多い意見交換を行いました。

稚内地域

最終日の5日目は、自然エネルギーをテーマに稚内のメガソーラーと宗谷岬ウインドファーム（風車）を見学し、サロベツや利尻で説明のあった風車と景観や野鳥との関係について現場で考えました。日本最北の地、宗谷岬からサハリンを遠望し、自然資源豊かな道北のしめくくりとして、宗谷丘陵フットパスコースのひとつ「白い道」を散策し北海道を後にしました。

このコースの目指すところは、国立公園の最前線で活動する様々な方のお話を聞き、自然と人との「軋轢の姿」と「共生の姿」を自分の目で見出し、自然の保護と恵みの享受について考えることです。豊かな自然の地域にも多くの人が暮らしていて、地域との関わりなしに自然は守れないことを実感し、新しい発見と忘れ難い経験が得られたのではないのでしょうか。

【学習を終えて】1年 植村 美沙

今回、はじめてFSに参加しました。講義では自然保護についてなんとなく守らなければならないものだと思っていましたが、実際に現地へ赴いて今まで目にしたことのないような広大な自然、星空、またそこに生存する動物を見て、圧倒されました。それと同時にそこで活動する人々や地域住民自身がその地域を誇りに思い、また魅力を丁寧に私達に話してくださる姿を見て、人間の利益の点を考えるだけでなく、人間が自然と共存できる環境こそ理想の地域であり、今回行ったサロベツ、利尻、稚内のように、その地域住民が魅力と考えれば自然保護にも通じると感じました。

【受入先からのメッセージ】NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク 嶋崎 暁啓さん

広い広い空と地平線まで続く大湿原をフィールドに、酪農業と保全活動の最前線をご案内させていただきました。人間活動と原生自然が隣接するサロベツで、地元の人々や行政担当者がどのように自然を見つめ、課題と向き合い、行動しているのか…。それぞれの想いに触れ、現場を知ることで、学生の皆さんが、今後の保全と利用の在り方について考えるきっかけにしていだければと思います。また美しい夕陽、満天の星空、新鮮な牛乳や美味しい魚介など、地域の魅力も満載でした。ぜひサロベツの自然にも興味を持ち、好きになってもらえたら嬉しいです。



採れたてのウニをさばいて軍艦巻に（利尻）



外来種オオハンゴンソウの引き抜き作業（利尻）

「金沢の街並み保存と石川県の風景表象・文化

－ 文学と歴史を中心に－

担当教員名 竹本 研史 根崎 光男

コース概要

日程	2018年9月11日～14日
場所	石川県金沢市・輪島市
参加人数	16名

コースのねらい

おもに文学と歴史学の観点から、(1)まず金沢市の町並み保存やまちづくりを学ぶこと、(2)次に、泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星という3人の文豪を輩出した金沢の風景を実際に目の当たりにして、文学作品による表象との異同を確認しながら文字芸術の可能性を問い直すこと、(3)「伝統と暮らし」をテーマとして、金沢とは異なる能登半島の自然と文化を学ぶことが目的です。

内容

初日は、金沢の三大文豪である泉鏡花、徳田秋聲らの作品舞台となった、浅野川流域を散策し、事前学習で分析した文学作品による表象と、自分たちが目にしている風景との差異について検討することによって理解を深めました。金沢の代表的な観光スポットでもある「ひがし茶屋街」では、1820年の創業以来、そのままの形を残す「志摩」でスタッフの方から茶屋についての解説をいただきました。徳田秋聲記念館では、学芸員の方に、徳田秋聲とその文学作品の全体像、ならびに文学館が抱える課題についてレクチャーしていただきました。



1820年創業以来、そのままのかたちで残されている、ひがし茶屋街のお茶屋「志摩」。従業員の方からお茶屋文化についての話を伺いました。

2日目は、能登半島の「伝統と暮らし」の文化をテーマに、輪島市で石川県漆芸美術館、白米千枚田、輪島製塩を訪れました。漆芸美術館では学芸員の方から漆芸の歴史や工法を学ぶとともに、伝統継承の困難さを伺いました。白米千枚田では、海に望む圧倒的な景観に驚嘆しながらも、その背後に隠れる農業の持続可能性をめぐる問題を確認しました。輪島製塩では、浜士の方から伝統的な揚浜式塩田と塩づくりについて学習しながら、併せて塩害などの諸問題について説明を受けました。



揚浜式塩田で海水を塩田に撒く体験をする学生

3日目の午前中は、「金澤町家研究会」のお二方の案内で金沢町家が数多く残る地域を歩きました。金沢町家の構造、保存方法、そして現代生活と保存の両立の取り組みを学びました。午後は、初日で歩いた浅野川流域と比較しながら、室生犀星、吉田健一らの作品舞台となった犀川流域を散策しました。妙立寺のスタッフに導かれて建物内をめぐりながら、吉田健一『金沢』において、主人公が幻想への入り口として妙立寺が描かれる必然性を実感したり、室生犀星記念館や「にし茶屋街」では、ガイドさんから室生犀星の人物像や芭蕉をはじめとする文学者などについてお話を伺ったりしました。



「金澤町家研究会」の代表の方に解説をいただきながら、町家を見学。

4日目は、吉田健一『金沢』の舞台である成巽閣と、多くの文人たちに愛された兼六園を訪れました。成巽閣では、建築構造とマリンプルーの群青の間に目を見張りながら、吉田がそこに見出した「西洋」について考察をめぐらしました。兼六園では、文人たちが取り上げた場所を中心に回りながら、それぞれの作品の描写をそれらに重ねました。

レポート課題として、学生たちが毎日つけていた「振り返りシート」に記された記録に基づき、改めて金沢・能登の伝統と暮らし、そして文学の現状と課題について考察し、事後学習では、各人のレポートを基にして、教員からの問題提起も含めて活発な議論がなされました。

学習を終えて

今回私は金沢市・輪島市を舞台にしたフィールドスタディに参加させて頂きました。数多くの文学作品のモデルにもなった石川県の雄大な自然や現在まで受け継がれてきた伝統を実際に自分の目で見られたことは大きな財産になったと思います。また、濃密な事前学習や事後学習があったことで観光旅行では決して分からない地域の現状や課題に向き合うことができました。人間環境学部の学生としてどう取り組むのかを考えさせられた夏でした（1年 大塚 朱莉）。

普段はただ何気なく美しさや面白さだけを見て終わってしまうような観光地の裏で、どのような人がどのような悩みを持って、それを改善しようとなさっているのかを知れてよかったですと思います。

また、文豪と呼ばれる人が作品として残した風景を実際に見てみて、その作品やその人に思いを馳せたり、作品と実際の風景の違いについて見てみたりするという、新たな風景の楽しみ方を模索できたことも興味深かったです（3年 河合 来望）。

「吉川 FS ブナの森から農業と農村を考える」

担当教員名 田中 勉

コース概要

日程	2018年8月19日～22日
場所	新潟県上越市吉川区
参加人数	16名

コースのねらい

吉川区のシンボル尾神岳に広がるブナの森から水田地帯にかけての吉川の美しい自然にふれ、河川や溜池からの水の利用、棚田の多面的機能など農業と自然のかかわりを実感し、集落営農・新規就農の事例を通して、農業の新たな展開についても学びます。

内容

上越市吉川区は稲作を中心とする農業地域です。ここでは、尾神岳（750m）から日本海にかけて、山間地に点在する棚田・平地の大規模区画に整備された水田農業の姿を見ることができます。日本の農業の縮図と言える地域です。

この FS の魅力は何と言っても「発見」にあります。プログラムの特徴は、自然と農業の関係を具体的に考えるために、ブナ天然林に覆われた山地から川の流れをたどりながら、取水堰・溜池・用水路・田んぼへと用水を確保・利用する工夫を見学し、その歴史と仕組みについて説明を受けます。

そして過疎・高齢化と後継者不足という厳しい現実の中で行われている新たな展開を学びます。いずれも関係者から直接話を聴く、実地に見学するという五感を使っての学習です。

毎日が「発見」の連続です。満天の星、ブナの葉のそよぎ、稲穂の波、自然の美しさと豊かさを実感します。一方で、思い通りにならない天候、日照りや長雨、猪や鹿の獣害、自然の厳しさ知ることにもなります。

「発見」に満ち、人の優しさ暖かさをしみじみ感じる吉川 FS は、学生生活を豊かにしてくれます。同地での FS は 2000 年以來 17 回実施され、参加者は延べ 300 名を超えています。



尾神岳より農地と日本海を見下ろして記念撮影

学習を終えて

「本当に来ることができてよかった。農業の現状は決して良いとは言えない中で、農家の方が試行錯誤しながら、まわりの人と協力しながら、前向きに農業をされていることを話される姿が心に刻まれました」（3年女子）

「どうすれば村がより活気ある場になるか、山間地で農業をすることがどれほど大切か、社会はどうなっていくべきで自分には何ができるか、考えをめぐらせている方々がいらっしやることに驚き、またその考えの深さに感動した」（1年男子）

「若い人が、この地域に関心を持ってくれてありがたいし、私たちには励みになる。今後も何らかの形で交流を続けられればと思う」（川谷もよりの会会長）



元上越市農林水産部長から講義を受ける



おいしい食事に笑顔も



用水路の見学



集落営農について学ぶ



山間地集落で農家の方に話を聞く



日本海を見に、ちょっとしたお楽しみ



新規就農したご夫婦に話を聞く、赤ちゃん大人気



巨大コンバインにびっくり



棚田で農にかける思いをうかがった



満天の星のもと花火も楽しんだ

「科学博物館で学ぶ」

担当教員名 谷本 勉

コース概要

日程	2018年8月～9月
場所	関東地方の科学博物館等
参加人数	18人

コースのねらい

関東地方の博物館を環境問題等を学ぶための現場（フィールド）として自在に使いこなし、生涯学習の場となるようにすることを目的とします。

内容

「科学博物館で学ぶ」は、グループ学習ではなく、個人参加を原則とします。参加者がそれぞれ立案した計画に従って学習していきます。具体的には、各地の科学博物館でどのような参加型の企画・セミナーが行われているかを調べ、参加するイベントを決定し、学習していきます。

例年6月中旬の土曜日の午後、最初の説明会を行います。この説明会にはできるだけ希望者全員の参加を認めています。ここで詳細な実施要領を解説します。その後、できるだけ夏期休暇に入る前に学習計画書を作成し、担当教員と相談しながら、参加する学習内容についての理解を深めます。

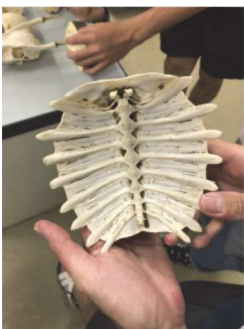
学習計画に際しては、1つのテーマが4時間以上のものを1日分の学習として認め、それ以下のものを半日分として、合計4日分の学習をすることを義務づけています。多くの場合8月中の土・日を何度か使うことになり、夏期休暇の他の計画との折り合いをつけることが重要になります。

今年の主な参加企画には次のようなものがあります。

- 8月4日「国立科学博物館附属自然教育園」：学習のテーマ「菌類学入門」
- 8月25日「神奈川県立生命の星・地球博物館」：学習のテーマ「岩石プレパラートの製作と観察講座」
- 8月24日「埼玉県立自然の博物館」：学習のテーマ「SLミュージアムトレイン」
- 8月1日「国立科学博物館」：学習のテーマ「火星大接近特別観望会」
- 9月1日「千葉県立中央博物館」：学習のテーマ「古脊椎動物学入門」
- 9月2日「東京都環境公社」：学習のテーマ「里山へGo」

学習を終えて

「今回は、今までのFSで興味を持った分野についてより詳しく学べただけではなく、実際に骨格標本が作れるなど、座学では学べないことが経験できた。このことにより、理解が深まり学習意欲が更に沸いた。だから、授業とは関係なくても自分で講座を申し込んでさらに学習を重ねより深い知識を身に着けたいと感じた。」（「古脊椎動物学入門」参加者）



カメの甲羅の裏側(9月1日)



根性菌糸束(山姥の髪の毛)(8月4日)



両引き鋸「重かった」(9月2日)

「過ぎ去ろうとしない過去 歴史を現在にいかに活かすか？ 長崎編」

担当教員名 辻 英史 竹本 研史

コース概要

日程	2018年8月22日～25日
場所	長崎県長崎市
参加人数	11名

コースのねらい

地域社会は、その歴史遺産をどのように活用しているのか？
現在、歴史を活用した地域振興やまちづくりが各地で盛んにおこなわれています。街の魅力を外に向かって発信しようとする際に、その街に固有の歴史上の人物や事件、建築物はどのような役割を演じているのでしょうか。郷土愛やアイデンティティは地域の歴史を通じてどのように作り上げられていくのでしょうか。長崎を実例として、これらの取り組みを学びます。

内容

- 長崎のさまざまな歴史遺産を訪問
長崎歴史文化博物館
三菱長崎造船所史料館
長崎原爆資料館／平和公園
大浦天主堂・グラバー園
軍艦島デジタルミュージアム
長崎くんちの練習
- NPO 法人・長崎コンプラドールの皆さんとともにまちあるき
長崎の夜景&星空散歩
長崎市街中心部の
長崎のキリスト教遺産



西坂の日本二十六聖人記念館前にて



鍋冠山から見た長崎の夜景

学習を終えて

長崎さるくという活動が一番印象に残った。この活動を通して長崎の従来の観光名所だけ巡るのではなく、何気ないところをガイドとともに歩き、長崎の良さを知ってもらう。更に長崎の魅力を体感したのち再び訪れてもらうことを目標としている。「さるく」とは長崎の方言で「歩く、歩き回る」という意味だ。私自身まちあるきと言われてあまり興味が起きなかったが、さるいたことによって長崎をまた訪れたいと思えたのである。(1年 大槻あおい)



眼鏡橋にて

「生業の聞き書きから考える島のサステナビリティ」

担当教員名 西城戸 誠

コース概要

日程 2018年12月25日～27日
(本来は2018年8月6日～10日の実施であったが、台風のため延期、日程短縮となった)

場所 東京都八丈町

参加人数 6名

コースのねらい

八丈島の生業に関する聞き取り調査、聞き書きの作業を通じて、島に住むことの意味、八丈島のサステナビリティを展望する。

内容

このフィールドスタディは、現地訪問や視察を中心としたフィールドスタディではなく、聞き取り調査とその後の聞き書き作成を行う意味でフィールドワークに近い内容となっています。事前学習の段階で調査テーマに関する資料を集め、質問項目の準備を行います。なお、フィールドスタディ中に、参加者は聞き取り調査の文字おこしや聞き書きに向けた作業（アウトラインの作成）を行っています。

1日目 (12/25)

早朝に羽田空港から八丈島空港に移動し、プログラム全体のオリエンテーションを終えた後、八丈島役場への訪問を行いました。参加学生の一人が、八丈島の昆虫の外来種に関心があったこともあり、八丈島の環境対策の担当者から、関係する話を伺いました。

午後は八丈島乳業 (<https://www.hachijo-milk.co.jp/>) の魚谷さんに、八丈島の酪農の歴史、魚谷さんご自身の八丈島への関わりと「動物福祉」の観点から行う現在の酪農業、今後の展望と島の将来などについてお話を伺いました。



八丈島乳業のジャージー牛



農場は海のすぐ近く



聞き取り調査の様子

2日目 (12/26)

午前中は、八丈島えこ・あぐりーまーにて、菊池義朗さんから生い立ちや戦争中の八丈島の農業、戦後の花卉栽培、八丈島の園芸農業の今後などについてお話を伺いました。山への散策（1時間）の中でシダ植物や、八丈の植生についての話も聞きました。

午後は、長田商店 (<http://kusayaya.com/>) の長田隆弘さんから、くさやの作成工程（くさや液とくさやに使う魚の関係）、八丈島の漁業やくさや産業の今後についてお話を伺いました。ご自身のライフヒストリーも交えた、2時間を超える熱のこもったお話を伺いました。

夜は、地元の若者のイベントを手がけ、地熱発電や小水力発電事業に関心を持つ峯元竜二さんから、八丈島の地熱発電と地域社会の関係についてのお話を伺いました。



八丈の植生について何う



くさや生産と漁業についてのお話



くさや液について何う

3日目 (12/27)

午前中は、大竜ファームの大沢竜二さんを訪問しました。大沢さんは趣味であるクワガタのブリーディングから八丈島での椎茸栽培を思いついたそうです。現在の八丈島の椎茸栽培の状況と、今後の可能性（体験型農園の構想など）についてお話を伺いました。

午後は、3日間で4名の方の聞き取り調査をまとめて、それぞれが聞き書きのアウトラインを作成し、全員で検討しました。最終的には担当ごとにそれぞれ各自で聞き書きを完成させます。

当初より短い3日間の滞在でしたが、お話を伺った以外にも、八丈島の方との交流にあふれるフィールドスタディができました。



クワガタの対決



椎茸栽培体験と聞き取り調査

学習を終えて

3日間のフィールドスタディを通して、島で生業を営む4人の方に聞き書き調査という形で話をうかがい、島のサステナビリティについて考えました。その中で、生で行う調査の難しさや、島の産業と暮らしの複雑な結びつきを学ぶことができました。聞き書きを行った4人は全員が異なるバックボーンを持ち、自身の生業が抱える事情や課題も人それぞれでしたが、島をよくしていこうとする思いが共通にあることが印象的でした。

また島民のあたたかさや密接なネットワークにも触れ、想定していたより多くの貴重な話や体験をさせていただき、より八丈島の魅力を深く感じることができました。夏に計画されていた当初の予定より短い日程でしたが、その分凝縮された濃いフィールドスタディとなりました。(3年・野村惇貴)

このフィールドスタディでは島の産業である酪農、園芸、くさや、しいたけ栽培の4人の方たちのお話をうかがい、聞き書きを行いました。実際に会って話すことは難しさがあるものの、事前学習ではわからなかった部分もより深くまで知ることができました。急遽お話をさせていただいた方も含め八丈島の方は人柄がよく、熱心に島の現状や、島のこれからの未来を話してくれて、とても考えさせられました。1人1人が八丈島のことを考え、原動力や実現力を持っていて、八丈島を愛してるからこそできることだと思いました。八丈島での人との出会いは素晴らしく、島ならではの温かみを感じ、濃い三日間を過ごせました。(3年・中島千裕)

「震災と地域再生」

担当教員名 西城戸 誠 横内 恵

コース概要

日程	2018年9月5日～8日
場所	宮城県石巻市
参加人数	24名

コースのねらい

津波被災地である石巻市の市街地と半島部の双方を訪問し、震災からの地域再生、復興の現状と今後の課題についての理解を深める。

内容

*本フィールドスタディの経緯と目的

2011年3月に発生した東日本大震災による津波によって、宮城県石巻市は大きな被害を受けました。法政大学人間環境学部では、震災直後からNPO法人パルシックと協働して、石巻市市街地や北上町における震災ボランティアを実施してきました。2016年度からは、石巻市を舞台として、震災復興の現場と地域再生にかかわるさまざまな試みを訪問し、また地域住民から、復興の現在の話を伺うことで、「復興とは何か」「復興支援とは何か」を考えていくプログラムを開始しました。本年度は特に「震災をどのように伝えるのか」というテーマを含めて、震災後の地域再生を考えていきます。

*行程について

1日目：石巻駅前に集合した後、公益社団法人・みらいサポート石巻のプログラムに参加しました。まず、南浜つなぐ館に行き、石巻市街地の津波被害の全体像を把握した後、震災語り部の方（参加学生と同世代の若い語り部）から震災当時の様子について歩きながら話を伺いました。午後は、「防災まちあるき」のプログラムに参加し、震災直後の写真などを記録したタブレットを持ちながら、震災前後の町並みの変化を理解しました。続いて「安心安全の街づくりを目指した地域の取組」として、料理店で震災が起きた時の対応やその後の避難訓練についてのお話を伺いました。



タブレットを使って
石巻市街地を歩く



南浜つなぐ館で津波被災
の状況を学ぶ



語り部の方と被災地を歩く



みらいサポート石巻の
活動のレクチャー

2日目：NPO法人みらいサポート石巻の方から石巻市を中心とした復興支援の過程について伺い、みらいサポート石巻による支援活動と、東日本大震災における支援活動と国際協力支援や熊本地震に対する支援と比較しながら、震災支援のあり方を考えました。また、ピースポートセンターいしのまきの方から、漁業支援プロジェクト「イマココプロジェクト」の説明を受けました。午後は、実際に東日本大震災における体験談を元にして作られた防災ワークショップに参加し、ゲーム形式で震災が起きた時の対応に関してグループ別で学びました。また、この2日間を通して、津波被災者の記憶をどのように伝えていくべきか、震災伝承のあり方を考えることになりました。

その後、北上町に移動し、宿泊先の追分温泉での豪華な夕食後、追分温泉のご主人から震災当初から、現在に至るまでの経緯と、震災後の観光のあり方に関するレクチャーを受けました。

3日目：午前中は、まず津波で多くの方がなくなった大川小学校を訪問、お子さんを亡くされた語り部の方から、大川小学校での被災状況などについてお話を伺いました。続いて復興まちづくり情報交流館北上館で集団高台移転地におけるまちづくりの活動を担ってきた鈴木昭子さん、川のビジターセンターで、北上で育児中の武山喜子さんからの話を伺いました。午後からは、北上町でまちづくり活動を行っているウィアーワン北上、イシノマキファーム、川のビジターセンターの方との特セッション、東日本大震災時に北上中学校3年生で、現在は北上町の震災を研究をしている大学院生の佐々木薫子さんの話、震災後の漁業復興について佐藤清吾さんからお話を伺いました。夜はできたばかりの白浜ビーチパークで地元の方と一緒にバーベキューを行い、お話と伺いながら交流を深めました。



大川小学校で語り部の方から
の話を伺う



震災時に中学校3年生だった方
から当時の話を伺う



震災伝承を考えるワークショップでの発表

4日目：午前中は3日間のフィールドスタディの振り返りを行い、震災を知らない世代にどのように震災伝承を行うべきかという点をグループ別に分かれて発表をしました。以上の4日間のフィールドスタディによって、私たちは、震災を伝えることや復興支援の意義と課題、さらに震災後の地域再生のための課題について、さまざまな観点から考えることになりました。

学習を終えて

私は、石巻FSの四日間を通し震災や石巻についてたくさんのことを学び、考え、充実した時間を過ごすことができました。実際に石巻に行き、私が一番驚いたことは石巻の人々の明るさと強さです。東日本大震災が起こった七年半前に、津波により壮絶で辛い経験をした方々と思えないほど明るく、目標に向かって前向きに進んでいたからです。そういった方々の被災経験談、行ってきた取り組み、これから目指していることを聞くことができ、自分自身も震災についてもっと考え向き合いたいと自然に思うことができました。私は、このFSを通して、震災は過去のことでなく、いつ自分の周りに起こってもおかしくない身近な問題だと改めて認識し、家族ともう一度話し合うきっかけになりました。(2年・橋本緑子)

私は今回の石巻FSで実際に自分で石巻の現状を確かめ、現地の方々から直接お話を伺えたことで文献では知ることができない経験、記憶があることを知ることができました。石巻は当時の被災の状況や復旧の過程だけでなく、そこにあった景観、暮らし、文化、そして命があったことを伝承していました。私は佐藤さんの「大川小学校には命、救ってほしかった命、救えた命、救えなかった命がある。」という言葉が忘れられません。また石巻の方々の「この地域の魅力を伝えたい、知ってほしい。」という思いが強く、被災地で活動する人々は被災者でありながら支援者であることを学びました。石巻FSは本当の復興とはなにかを考える貴重な経験になりました。(2年・平出花衣)

「奄美大島の自然環境・地場産業・歴史文化を学ぶ」

担当教員名 長谷川 直哉 竹原 正篤

コース概要

日程	2018年9月10日～13日
場所	鹿児島県奄美大島（奄美市ほか）
参加人数	40名

コースのねらい

奄美大島の自然環境・地場産業・歴史文化を学ぶことで、離島に生きる人々の価値観を肌で感じ、地域社会のサステナビリティを考える。

内容

1日目

奄美大島空港にて現地集合後、原ハブ屋にて奄美大島の自然と生態系におけるハブの位置づけに関する講演を聴講し、島民の生活とハブの共生関係について学習しました。夜は、ばしゃ山村リゾートにて郷土料理である「鶏飯」を堪能し、自己紹介等を通じて参加メンバー間の交流を深めました。

2日目

奄美大島の南西に移動し、マングローブパークにてカヌーを使ってマングローブの原生林を見学し、奄美大島特有の自然を感じることができました。午後は半潜水船「せと」に乗船し、奄美大島と加計呂麻島の間にある大島海峡においてサンゴ礁を見学しました。200種ともいわれるサンゴが生息する海中の景観は想像を超える素晴らしさでした。その後、大島海峡と加計呂麻島を一望できる高知山展望台に移動し、改めて奄美大島の豊かな自然の尊さを実感しました。夕刻は東シナ海を臨む大浜海岸にて海水浴とバーベキューを堪能し、1年生から4年生まで学年を超えた交流を図ることができました。



カヌーによるマングローブ原生林の散策



高知山展望台から加計呂麻島を望む

3日目

午前中は大島紬村を訪問し、地場産業である大島紬の作業工程や作品を見学しました。世界三大織物に数えられる大島紬の高度な技術と職人技の一端を学ぶとともに、生活様式の変化による大島紬のマーケティングの課題について議論しました。

午後は人間環境学部への進学者もいる鹿児島県立大島高校を訪問し、高校生約40名との交流会・ミニオープンキャンパスを実施しました。高校生との進路に関する対話を通じて、大学生活で何を学びたいのか、将来の目標は何かなど、FS参加者が自分自身を見つめ直すきっかけを得ることができました。交流会は大いに盛り上がり、当初の予定時間を大幅に延長して実施しました。



大島紬の製作工程を学ぶ



県立大島高校での交流会（グループ討議）



県立大島高校での交流会（参加者全員で記念撮影）

4 日目

午前の名瀬市内の中心商店街の見学、初日に訪れたばしゃ山村にて地元の方との交流や郷土品に触れるなど、奄美大島での学びの振り返りを行いました。台風による関西国際空港の閉鎖によってフライト時刻が5時間ほど遅延したため、予定を変更して、ばしゃ山村海岸にて時間の許す限りマリンスポーツを堪能しました。



ばしゃ山村海岸にて

学習を終えて

フィールドスタディで初めて奄美大島を訪れて、日常生活では絶対にできない貴重な体験をたくさんすることができました。関東圏に住む私とは全く違う生き方をする住民や、真っ青な海・マングローブ林をはじめとする美しい自然、奄美大島特有の文化・産業など、見るもの全てが新鮮です。また、奄美大島の文化や産業に携わる人々や高校生たちと関わり、その活力に圧倒されました。（2年生）

高校生たちの中には、「将来は島を良くしていきたい」「島に貢献する仕事がしたい」と話す人がいました。それは、「島」を身近に感じていなければできない発言だと思います。私は自分の住んでいる地域に貢献することを、我が事として考えたことはありません。奄美のことを我が事として考える高校生の姿から、社会課題を他人事ではなく自分事として考える姿勢を持つことが、未来を担う人間の役割であることを学びました。（1年生）

「SCOT (Suzuki Company of Toga) の演劇とその背景： 富山の文化と自然を学ぶ」

担当教員名 平野井 ちえ子

コース概要

日程	2018年8月23日～26日
場所	富山県南砺市・砺波市・富山市
参加人数	11名

コースのねらい

利賀(南砺市)は、芸術創造による真の国際交流の場として、世界の演劇人から「演劇のメッカ」と称されています。本FSでは、観劇だけでなく、利賀とその近隣の文化と自然を学び、演劇と場の関わりについて考えます。

内容

タイトルにあるとおり、本FSの中心テーマは、SCOTの芸術創造の場を探訪し、その作品世界により一層の理解を深めることです。そのためには、ぜひとも五箇山に現存する合掌造りの集落を見学し、豪雪地帯の自然・文化・歴史についても学べる旅にすべきであると考えました。2015年3月に北陸新幹線が開業し、東京から北陸各地へのアクセスが便利になりましたが、富山市内から利賀芸術公園までの道のりは、旅慣れない学生の個人旅行としては少々ハードルが高そうです。そのような旅こそ大学の授業として後押ししたいという思いも、本FS企画の追い風となりました。さらに、富山市内に宿泊することを生かして、全国的に有名な「おわら風の盆」や砺波の散居村も探訪したいと、夢はどんどん膨らんで、最終的に以下の行程が確定しました。

- 1日目： JR富山駅集合、富山県自然博物館ねいの里を見学、おわら風の盆前夜祭ステージ・町流しを鑑賞。
- 2日目： 相倉・菅沼の合掌集落をはじめとする五箇山を訪問。夕陽の砺波散居村を展望。
- 3日目： SCOTサマーシーズンの2演目を観劇。
(旧体育館を劇場に改造した「利賀大山房」、池や山など利賀の大自然を背景に盛大な花火の美しい「野外劇場」などでの観劇です。)
- 4日目： 富山市および近隣地域でのグループ別学習、夕方現地解散。

SCOTサマーシーズンでは、インドネシアとの共同制作『ディオニュソス』(利賀大山房)とサマーシーズン恒例の『世界の果てからこんにちは』(野外劇場)という2つの鈴木忠志演出作品を観劇しました。利賀大山房の『ディオニュソス』は、役者がそれぞれの母語で台詞を話すSCOTならではの作品でした。スズキ・トレーニング・メソッドで培われた身体性は、言語の違いを超越して、観る者の感性に訴えかけます。『世界の果てからこんにちは』は、鈴木作品のコラージュのようなサービス精神溢れる作品で、古代ギリシャの劇場に原型を求めた本格的野外劇場で上演されました。池や山を借景に大がかりな照明や花火で盛り上がる舞台は、まさに至福の極みでした。

演出家鈴木忠志氏は、1976年に、東京から利賀村へ活動の拠点を移しました。その理由は3つあります。第1に、時間的制約のない稽古場と公演のために自由にアレンジできる空間の確保を望んだということ。第2に、既存の劇場ではない新しい空間、とくに生活の痕跡が残る空間を劇場にしたかったこと。第3に、東京の日常から切れたところで演劇をやりたかったということ。FS参加者は、現地に足を運んでみて、鈴木氏の劇場についての考えが実感できたと思います。

学習を終えて

五箇山をご案内下さった南砺市文化・世界遺産課此尾治和課長から次のメッセージをいただきました。

南砺市「五箇山」には、45年前に国の史跡指定を受けた懐かしい原風景が豊かに息づく、相倉集落と菅沼集落の2カ所の合掌造り集落があります。他に類を見ない合掌造りの建築様式と景観に加え、これを守るために受け継がれてきた「暮らし」が高く評課され、平成7年12月に白川郷とともに世界遺産に登録されて20周年という大きな節目を迎えました。世界中から注目を浴びる合掌造り集落は、その地域に住む人々だけでなく、市民一体となった保存継承活動が重要であり、「南砺の宝、日本の宝」を誇りにして後世に引き継いでいかななくてはならないと考えております。

法政大学の皆様には、合掌造り集落などの歴史ある伝統文化と SCOT 演劇などの創造的な文化が融合する「文化芸術創造都市・南砺」のファンになっていただき、今後も再訪されて調査研究いただくことを願ってやみません。

FS 富山に参加した福原百香さんの感想です。

富山は何度も訪れたことがあります。今回のFSに参加して多くの発見や学びがありました。合掌造り集落など有形の文化遺産だけでなく、こきりこ節などの民謡やおわら風の盆のような地域を代表するお祭りが確実に受け継がれていることに感心しました。南砺市に文化・世界遺産課が設置されていることは、地域の文化を継承することへの大いなる意気込みだと思います。ねいの里自然博物館では富山の自然について体験的に学ぶことができましたし、散居村ミュージアムでは地形を生かした農業のあり方や自然と闘う家屋の構造などについてお話を伺いました。こうした富山県の文化と自然を体系的に学んだ後、私たちは利賀芸術公園を訪れました。人々が日常を切り捨てて訪れる芸術の場は、大変貴重で贅沢な空間だと実感しました。



相倉合掌集落での集合写真。南砺市の此尾課長が五箇山の歴史と文化について解説してくださいました。



第1回世界演劇祭のために建設されたギリシャ式野外劇場。磯崎新氏の設計。

「大田区の環境と産業」

担当教員名 藤倉 良

コース概要

日程	2018年8月3日～8日
場所	東京都大田区
参加人数	14人

コースのねらい

町工場で知られる大田区ですが、それだけではない多様な顔を持っています。ここでは「ものづくり」や「ものこわし」の現場と、実は豊かな自然生態系を体験しました。

内容

8月3日。フィールドスタディ最初の目的地は、海苔のふるさと館です。海苔養殖は江戸時代にこの地で始まりました。ここで生まれた養殖技術は、全国に広まり、海苔は日本人の食卓に欠かせない食材となりました。大森は海苔の生産と販売の中心地として栄えてきましたが、1964年の東京オリンピック開催に向けた交通整備のために海岸が埋め立てられ、養殖は行われなくなりました。それでも大森には今も多数の海苔問屋が店を構えています。2008年に開所されたふるさと館では、学芸員の小山文大さんから海苔養殖の歴史や方法についてお話をうかがいました。



東京港野鳥公園入口の温度計。40度を超える猛暑でした。

ふるさと館の見学を終えた後は、

40度の猛暑の中を歩いて東京港野鳥公園を訪問しました。東京湾の干潟は殆ど全部埋め立てられてしまったのですが、渡り鳥の中継地点として重要なことから、地元の人たちの要望により自然再生によって作られた公園です。海水をかぶる干潟だけでなく、海水と淡水の混じる汽水域や淡水の池、水田や林地といった多様な生態系が整備され、それぞれに特有の鳥類が四季を通じて飛来してきます。これまでに200種以上の鳥が観察されています。私たちもシギ・チドリ類を多数観察できました。

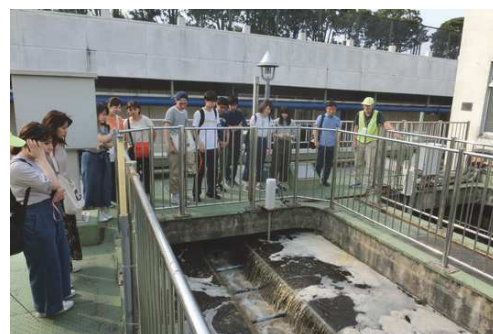


東京港野鳥公園：設計者の林聡彦さんに設立までの経緯や公園の機能について説明していただきました。

8月4日は大田区が建設した町工場のアパートであるテクノ FRONT 森ヶ崎を見学しました。多数の町工場が立地する大田区ですが、工場に隣接してマンションが立ち並ぶ住工混在地帯となつてからは、騒音や振動、悪臭などの公害苦情が多発するようになりました。大田区は中小の町工場が入居できる5階建て工場アパートを建設し、中小工場が安定して操業できる場を提供したのです。

続いて、日本最大の下水处理場である森ヶ崎水再生センターを見学しました。下水処理の仕組みを学習したのち、下水が処理されて東京湾に放流されるまでの過程を見学しました。

8月7日は家庭ごみが処理されて、最終処分場に至る経路を見学しまし



森ヶ崎水再生センター：この活性汚泥槽で下水中の有機物が除去されます。



東京湾中央防波堤：背後の広大な埋立地が都内23区から排出された廃棄物の最終処分場です。

灌漑機、スマートフォンなどの小型家電や自動販売機などの営業用機械のリサイクルを行っています。蓄積された経験から得られた「ものこわし」の技術が活用されています。分別された部品は他の工場に運ばれ金属元素ごとに分離されてリサイクルされます。

最後の訪問先は食品廃棄物をリサイクルする株式会社アルフォです。食品製造工場、スーパー、コンビニ、レストランなどから出される売れ残りや食べ残し、調理くずなどの食品残渣を減圧されたタンクの中で低温の油で揚げて水分を除去し、家畜の飼料として出荷しています。近年ではバイオマス発電も行っています。

学習を終えて

大田区の産業について学びました。「海苔のふるさと館」では名産の“海苔つけ体験”をし、海苔のできる過程を実体験しました。「東京港野鳥公園」では東京湾岸のサンクチュアリに息づく野鳥を観察デッキから間近にし、また水辺のカニ達に触れる体験は初めてのものでした。「テクノ FRONT 森ヶ崎」では、精密技術者の力が工場群という形に集約され、ものづくりの小さな巨人たちが日本の基盤技術を支える熱量を感じました。最も心に残ったのは「中央防波堤」でした。人間の日々の生活から出るごみ・廃棄物が青かったであろう海に地層の様に埋め立てられ、変容して来た様は多くのメッセージをくれました。この度の学習は自然に生きる生き物と、人間が生きるために払わなければならない代償を同時に目に焼き付ける、貴重な体験となりました。繰り返す日常からは見えない、大切な物が見えたように感じた4日間でした。(社会人学生3年 大津千鶴)

コンビニから出る賞味期限切れの廃棄弁当や、飲食店の食べ残しなどは全て清掃工場へと運ばれ、焼却されるものだと思っていました。しかし「アルフォ」では、食品廃棄物から「油温減圧式脱水乾燥法(天ぷら方式)」により食用油で水分を蒸発乾燥させ飼料化された「アルフォミール」の製造と、この飼料化の過程で発生するメタンガスを利用し、メタン発酵させバイオガス発電をする二つのリサイクルが行われていました。

私はものに困ることなく毎日を過ごし、当たり前のように消費し、要らなくなったものを廃棄しています。しかし、最終処分場である中央防波堤の寿命も残り数十年だそうです。後先考えず大量生産された結果、無駄となって廃棄されたものがたくさんあることは事実です。大量に廃棄されてしまっていることを問題視し、これからどのように対応していくかを考えていく必要があると思いました。(3年生 本多加純)

た。まず、大田清掃工場を訪問し、ごみの搬入から分別、焼却されるまでの中間処理過程を学習しました。続いて、東京23区から発生するごみの最終処分場となる中央防波堤をバスから見学しました。すでに東京ドーム17個分の面積を有する区画の埋立が終了し、現在は東京ドーム110個分の広大な区画が埋め立てられています。ここが満杯になったら、その後の最終処分場がどうなるかはまだ決まっていません。

8月8日は、東京都のスーパーエコタウンに立地する2つのリサイクル工場を見学しました。

最初に訪問させていただいたのは、電気製品をリサイクルする株式会社リーテムです。家電リサイクル法に定めるテレビ、冷蔵庫、エアコン、洗



株式会社アルフォ：タンクの中で食品廃棄物の水分が除去されて、家畜の飼料になります。

「障がい者福祉の体験」

担当教員名 朝比奈 茂 宮川 路子

コース概要

日程	2018年8月4日～17日
場所	群馬県安中市「ゆきわりそう」の山荘内にて
参加人数	24名

〈内容〉

本フィールドスタディは、学部創設以来、現在まで行われてきたロングラン・プログラムであり、私たち人間について考えることの出来るプログラムの一つです。豊島区南長崎に所在する「ゆきわりそうグループ

(<http://www.yukiwari.org/top.htm>)」の理念に共感し、互いに理解しあいながらここまで歩んできました。

内容は、普段、都会の中で生活している障がい者の方々が、避暑を兼ねて自然豊かな群馬県安中市の山荘で過ごす際の引率や日常生活を支援する活動です。参加学生は専門的に障がい者福祉を学んでいませんが、ゆきわりそうの職員の指導のもと実施してきました。同じ人間でありながらあまりにも違う生き方をしている障がい者の方々と、寝食をともにする「合宿形式」で行うことにより、人間について深く考えることができるプログラムであると、これまで参加したOB,OGの方々が述べております。普段私たちは、自分の意志によって行動を決定し、自由に日常生活をおくることができます。これは当たり前なのですが、そうでない人が世の中にいることを、このFSを通じて身体全体で感じ得るプログラムであると期待しています。

〈実施時期及び実施プログラム〉

体験実習は、群馬県安中市内にある「ゆきわりそう」の施設で2泊3日の合宿形式で行われます。事前学習でそれぞれのプログラムの内容を確認し、その後自ら参加するプログラムを一つ決定します。

以下、プログラムと対象者を記載します。

コースのねらい

障害者と合宿を通じて寝食および行動をともにすることで、人間としての生き方を実感する。また福祉活動における仕事内容、それに携わっている方々と意見交換をすることで、現在の障がい者福祉環境について理解を深める。



山荘付近、ひまわり畑の散策



食事の介助をする学生

- ・ ソフトクリーム : 知的障害児・者
- ・ クレヨン : 知的障害児・者
- ・ 絵画 : 知的障害児・者
- ・ マラソン1 : 知的障害児・者
- ・ マラソン2 : 知的障害児・者
- ・ ハーフマラソン : 知的障害児・者
- ・ 和太鼓 : 知的障害児・者
肢体不自由児・者
- ・ ゴロ野球 : 知的障害児・者
肢体不自由児・者
- ・ 遊び塾 : 知的障害児



マラソン前の準備体操

〈事前および事後学習〉

社会福祉法人地球郷より担当者（姥山剛代表）を講師に招き、準備→体験→総括における一連の流れについて、説明を受けます。事前学習では、組織の基軸となっている「ゆきわりそうグループ」の活動内容や、障害者の身体的および精神的特徴について、DVDなどの視聴覚機器を用いて全体像の理解を深めます。学生は事前学習の内容をもとに各自プログラムを決定し、後日「ゆきわりそう」での研修を受けた後に、当日を迎えることとなります。



参加者全員での昼食の様子

体験実習を終えた後に、「ゆきわりそう」から担当者（姥山代表）招き、事後学習（報告会）を行います。学生はいくつかのグループに分かれ、各々が行った活動を発表します（情報の共有化）。グループ内で共有化をはかった後に、「FSを通じて学んだこと、考えたこと、これから行うこと」をテーマにグループごと発表を行います。

〈参加学生の実施報告書から：一部抜粋〉

このフィールドスタディーで、学んだことの一つに、知的障がい者に対する印象が大きく変わったということです。自分で大抵の生活は出来ますし、声や言葉と言ったコミュニケーションを取る手段や能力を、たまたま無く生まれただけで、私たちと同じように理解し行動できると知りました。それと同時にそう思っていなかった私も偏見を持っていた1人なのだと気づきました。障害の程度も症状も一人ひとり異なり様々です。薬の量や生活の補助もみんな同じではありません。しかし、ゆきわりそうのような支援施設に通い、少しでも自分でやろうとする姿、私たちでも辛いぐらいのランニングを走り切る姿、役割を見つけて行動する姿を見ていたら、私たちと何が違うのか分からなくなるほどでした。幼稚な言葉ですが、本当にすごいです。利用者の方々もその家族もそして職員の方も。最後にミーティングで自分の感想を言った時に私は少し感情が高まってしまいました。施設の職員の方がここまで大変な責任の大きい仕事を人の為にやってあげる素晴らしさ、又利用者一人ひとりの人生や努力に触れることが出来たこと、うまく表現出来ませんが全てに脱帽するレベルで胸に刺さる体験をさせて頂けたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。

「フィールドスタディ中国 北京・承德・山東・上海 —中国大陸で地球環境問題、歴史文化を学ぶ—」

担当教員名 日原 傳 朝比奈 茂

コース概要

日程	2018年8月30日～9月8日
場所	中華人民共和国（北京・承德・山東・上海）
参加人数	17名

コースのねらい

中国の砂漠化の迫る地域での緑化事業、中国北部の水危機問題対策としての南水北調プロジェクト、黄河下流域の現状などを見学し、地球規模での環境問題について考えます。

また、避暑山荘・万里の長城・景山公園・天安門広場・前門・泰山・孔廟・孟廟・外灘等を訪れ、中国の歴史と文化を学びます。現地の大学を訪問し、学生同士の国際交流をはかります。

内容

中国の多様な地域や都市を訪れ、地球環境問題、中国の歴史・文化・社会などを体験的に学習し、総合的に考えることを主な内容とします。

避暑山荘

河北省承德市にある清朝の離宮です。康熙帝が創建し、乾隆帝の時代に拡張されました。総面積564万平方メートルという広大な敷地を持ち、周囲10キロは石積みの宮牆で囲われています。南は宮殿区、その北東に江南の風景を模した湖水区、その背後に広がる平原区と山区の四つの区域によって構成されています。また、避暑山荘の周囲には「外八廟」と称するラマ教寺院が点在しています。避暑山荘を見学したのち、外八廟の一つ「普陀宗乘之廟」も訪れました。

塞罕壩さいかんぼ国家森林公园

河北省の最北部に位置し、内モンゴル自治区克什克騰旗に接しています。五十年余に及ぶ植林活動により、森林率は11.4%（1962年）から80%（2016年）に増加したといえます。その活動の実績により、国連の環境保護に関する賞を獲得しました。植林の歴史を展示する塞罕壩展覧館を訪れ、詳しい説明を受けました。また、公園内に作られた七星湖という沼沢地に行き、湖の周囲に敷かれた木道を歩きました。

万里の長城

塞罕壩から北京に戻る途中で万里の長城の「金山嶺」に登りました。急勾配の階段を登り、累々と連なる長城の威容を目の当たりにしました。

南水北調プロジェクト団城湖管理处

「南水北調」は、南方にある長江の水を水の不足する中国北部へ運ぶというプロジェクトです。東、中央、西の三つのルートが計画されています。そのうちの中央ルートの北京の到達点に置かれた管理处を見学し、説明を受けました。中央ルートは2014年12月に第一期工事が完成し、取水地である丹江口ダムでは年平均83.4億立方メートルの水が取水され、そのうち10.5億立方メートルの水が北京に供給されているとのこと。



「避暑山荘」の文字は康熙帝の直筆です。



金山嶺長城に登りました。急勾配の階段が延々と続きます。

済南

済南市は山東省の省都です。古来、泉が多く湧出し、「泉城」の異名があります。「済南七十二名泉」の筆頭に挙げられる「趵突泉」を訪れました。また、市の北を流れる黄河を見学しました。

山東師範大学

山東省済南市にある広大なキャンパスを有する大学です。その日本語学科の学生と交流しました。数人ずつ班に分かれ、大学での学び、普段の生活などをテーマに語り合いました。その後、山東師範大学の学生の案内でキャンパス内を見学、学生食堂で一緒に食事をとり、合同写真を撮って大学を後にしました。

泰山

泰山は中国の神聖な五方の名山「五岳」の筆頭に挙げられる山で「東岳」と呼ばれます。かつて封禪の儀式が行なわれた地でもあります。中天門から南天門までは登山組とロープウェイ組に分かれ、登山組は二時間ほどかけて延々と続く石段を登りました。

孔廟・孔府・孔林／孟廟・孟府

曲阜にある孔子を祭るみたまや「孔廟」、孔子の子孫が代々住んだ邸宅である「孔府」、孔子とその後裔の墓苑である「孔林」を訪れました。鄒城にある「孟廟」「孟府」も訪れました。「孟廟」は孔子の思想を受け継いで性善説を唱え、仁・義による王道政治をめざした孟子を祭るみたまやです。中国の墓制について学ぶこともできました。

上海

上海ではグループに分かれて、自由行動の時間を設けました。それぞれ、明代の庭園「豫園」、豫園商場、上海博物館、魯迅故居、魯迅記念館、近年開発された浦東地区の高層ビル群などを見学しました。夜は、上海の母なる河「黄浦江」の東岸に位置する「外灘」の夜景を皆で見に行きました。

学習を終えて

- ・山東師範大学は全寮制で、学生はほとんどの時間を大学の中で過ごしていることを知りました。キャンパスは広く、スーパーや美容室、広い道路まであり、学校というよりも一つの街のように感じることが驚きました。(2年 小林明依)
- ・自己の視野を広げるためには現地へ実際に行き、五感を使って学ぶことが重要です。今回のフィールドスタディは、新たな研究課題を見つける機会になり、とても充実した10日間でした。(2年 石井理沙)



南水北調の中央ルートでは、この太さの送水管で北京に水が送られています。



景山公園から故宮を眺めました。手前の門は神武門です。



北京から済南へは高速鉄道で移動しました。



済南市の北の郊外を流れる黄河です。思ったほど河の幅がありません。対岸がすぐそこです。



山東師範大学日本語学科と学生交流をしました。その合同記念写真です。